

# 井上円了研究序説

## — 妖怪博士の奇想 —

連載第一回 序説の序論

中島 敬介



明治36～38年（45～47歳）の井上円了  
提供：東洋大学井上円了哲学センター

いのうえーえんりょう【井上円了】（1858—1919）

明治—大正時代の仏教哲学者。安政5年2月4日生まれ。東京大学在学中の明治17年哲学会を組織し、仏教の復権を目指す。20年東京湯島に哲学館（現東洋大）を創立。国粹主義に共鳴し、翌年政教社の創立にくわわる。迷信打破のため『妖怪学講義』をあらわし、妖怪博士といわれた。中国視察中の大正8年6月6日大連で死去。62歳。越後（新潟県）出身。名は襲常。著作に『真理金針』『仏教活論』など。

（上田正昭他監修『講談社日本人名大辞典』（2001）講談社、p.215）

《エンリョー…、って誰？》

他に類を見ない「実績」を残しながら、相応に評価されない人物は少なくない。井上円了（1858—1919）もその一人である。ユニークな思想家でありながら、そして己れの思想を実践した稀有な人物でありながら、一般向けの本には、ほぼ登場することがない。思想（史）研究の入門書でもせいぜい——国粹主義者が結成したとする——「政教社」との関わりで名前が載っている程度である。

本稿冒頭のプロフィールは——「神話・伝説・小説に登場する神々や架空の人物」も含め——約6万5600人を収録する大型人名辞典からの引用だが、すっぱり抜け落ちているものが二つある。

一つは著述活動。大学予備門の学生時代から中国・大連で没するまで、円了は1年も欠かさず文章を書き続けた。先のプロフィールには3冊しか見えないが、刊行された著書は単行本・講義録だけで——なんと——182冊、新聞や雑誌に掲載された論文等は——実に！——857編にのぼる。分野も多岐にわたり、学際的（inter-disciplinary）どころか、たった一人で複数の学問領域（multi-disciplinary）に分け入っている。とりわけ円了の「妖怪学」は——一般の理解とは異なり——理学・医学・哲学・心理学・宗教学・

教育学の諸学を内包している。今日でも定義の難しい超学問領域性（trans-disciplinary）を先取りしたものと言える。

省略されているのは著述活動だけでない。円了は27年間にわたって、全国巡回講義（巡講）を敢行した。総日数は——なんと——約3600日。北海道から沖縄まで全道府県をくまなく巡り、訪れた市町村数は今日に置き換える——と1024——実に！——全体の約60%に相当する。のべ講演回数は——これまた実に——

7000回を超えている。聴講者数は残っている記録等からの類推で——またまたなんと！——285万——まさに空前の——おそらく絶後の——スケールで行われた日本全国巡回講義であった。しかし、その旅は「汽車は三等、弁当は握り飯」という。実に質素なものだった。しかも、明治39年（1906）の奈良県での巡講を例にとると、4月初旬から5月中旬までの約1か月半に26町村（当時）・28箇所を巡り、合計76回の講演を行っているが、その移動は



旅行携行品  
提供：東洋大学井上円了哲学センター

主に「吉野山中人車の便なき所を跋涉し、毎日草鞋をうがちて峻坂を上下」するという、秘境探検さながらに過酷なものであった。しかし、この——「壯絶とすら言いたくなる——巡講も、先の人名辞典には一文字も現れない。

中国での急逝も巡講途上の出来事だった。早朝の列車で大連に到着した円了は、尋常でない「疲労の濃さ」が見て取れた。当時の中国は、抗日を叫ぶ「五四運動」で激しく揺動し、20数省・約150都市で日貨排斥の嵐が吹き荒れていた。そのような状況下で決行された中国での巡講であった。周囲の者は休息を勧めたが、円了は——数時間後を予知したかのように——「休む必要はない。死んでから墓の下でゆっくり休む」と遮ったという。

なぜ、こういうことが円了の人物紹介として描かれないのか。定めし、一般的な——と言っても「知る人ぞ知る」程度の狭い範囲での一般ではないが——円了のイメージにそぐわないからだろう。大量の著作を次々にものする円了には、当時から世情に阿る「投機の士」だの「際物士」、あるいは「学商」と罵る声が浴びせられていた。巡講に対しても、寄付金集めのドサ回りとか守銭奴などと嘲る者もいた。先に挙げた真摯な言葉は、曲学阿世で金に汚い人物には似合わない。円了にふさわしいレッテルは他にある。それは引用したプロフィールにも、三つの言葉として現れ

言葉が直結していることからすると、円了は臨終の直前まで、巡講に込めた当初の志を変えなかったことになる。文字通り死ぬまで続けられた巡講の本旨は、文中にみえる「此大業」の「成功」にあったのだ。

では「此大業」とは何か。円了は、次のように説明する。

国家の爲めに其力を盡し一志を立て、真理の爲めに其心を竭さるへからす是れ実に人生の二大義務にして余か畢生の二大目的なり「…」天下の正道を履み人情風俗の矯正、教育宗教の改良、皆之を其一身に任して国家万世の大系を立つるか如きは一層勇壯の事業にして余か畢生の目的とする所なり

文意は明瞭だが、前半と後半が振れていて、判然としない。少し丁寧に読んでみよう。前半は「国家」と「真理」に身も心も捧げるのが、己の義務であり人生の目的との言明である。なんと殊勝な心がけよと思わせて、後半になると「天下の正道」・世間の風潮・教育や信仰のあり方、その全てをより良いものに作り直すと言い出している。どういうことか。前半の「力を盡し」「心竭」すと誓った「国家」のかたちや日本の「真理」は、普通に想像される官製の国是ではなかったようだ。後半に明記しているように、円了自身が「畢生の目的とする」／「一身に任して」／「立つる」／

ていた。すなわち「仏教の復権」／「国粹主義」／「妖怪博士」。つなぐところなる。エンリョーは、シューキョーを説き・アイコクを叫び・ヨーカイに耽るアブナイ人です、だから良い子の皆さんは近づかないようにしましよ、と。だが先に触れた臨終直前の言葉からは、シューキョーもアイコクもヨーカイも立ち上がってはこない。私には「アブナイ人」のレッテルの方が、円了には不釣り合いに思える。

### 《呻吟する円了》

休む必要はない。死んでから墓の下でゆっくり休む。

これは疲労困憊のあまりに洩れた讒言うわごとだろうか。だがこんなことも言っている。

余は今其心に期する所ありて此大業を計画せる者なれば死生豈余か意とする所ならんや一身を犠牲にして其成功を期するか如きは余か固より覚悟する所なり

口語と文語の違いはあるが、内容的には後者が前者に続く言葉としても違和感がない。だが事実逆で、後者は30年近く前にさかのぼる明治24年（1891）、ちようど巡講をスタートさせた頃に書かれたものだ。この二つの

「万世の大系」を指していたのである。明治の半ば、円了は「万世の体系」という——当時の統治原理を象徴する「万世一系」を皮肉るような造語まで使って——御一新以来の政府方針に盾突いて、日本の近代化をやり直しますと宣告したのだ。しかも「皆之を其一身に任して」（「根こそぎ、自分一人の責任でやってみせます」と）。

あわてて付け加えておかないといけないが、この明治24年の一文は、普通そのようには理解されていない。うすうす気づいていた研究者も少なくないとは思うのだが、これまで論考などで表明されたことはない。従来は、上記引用とは別のところの「其の既納の金額の如きは僅かに百五十分の一」と「意外の失望」とが接続されて、概ね次のように解釈されてきた。全国巡講は、私学経営の拡充のための寄付金募集が目的だった。円了は物乞いするように地方（田舎）を回ったが、目論見どおりには集まらなかった。落胆のあまり、焦燥と怒りも交えて筆を執ったのが明治24年の本文。だが集まらないのも当然で、円了のやり方問題があった。私学創立者自らが、直接地方に向いて講義（講演）し、その謝礼代わりに募金を求めるなど非常識で誰もしない。なぜかと言うと非効率も甚だしいからだ。ちよっと考えれば子どもにもわかることなのに、円了は恥ずかしげもなく募金が集まらなさと不満を口にしてる。



失笑するしかないではないか、と。

## 《円了からの出題》

だが失笑を買って良いのは、円了を嗤う者の方だろう。誰でもわかる非効率さを、なぜ円了だけがわからなかったのか。有力者に大口の資金援助を求める方法を思いつきもしなかったと言いたいのだろうか。わずか3年前の私学開設の際には、その方法で成功しているというのに。金集めという目的に小口募金という方法がつかないなら、どちらにも大きな意味はなかったと考えるべきではないか。円了の意図は別のところにあつたとすれば、答えは一つしかない。自ら現地に赴いて講義・講演すること、これを狙いに行っていたと考えるしかない。寄付金の多寡は、聴衆の理解や賛同の指標である。誤読された「意外の失望」は、文脈上「其の既納の金額の如きは僅かに百五十分の一」の上空を素通りして、これも別の箇所の章句「余が精神の未だ盡さざる所あるによるか」に突き刺さっている。円了の呻吟は寄付金額の些少さではなく、自らの無力さに向けられていたのだ。

円了は明治39年(1906)に私学経営から退いている。もし巡講が学校経営の資金目当てなら、この時点で止めていたはずだ。だが実際には巡講というスタイルを全く変えず、それまでの13年間(「前期」)よりも遙かに濃密に、それ以降も14年間(「後期」)続けられた。年数では1年の差でしかないが、巡講日数・巡講地ともに後期は前期の3倍に達している。たしかに両者では動機や目的の違いがあり、取り組みの体制や寄付金の用途などに変更は認められる。だが巡講そのもののコンセプトや内実に変わりはないはずだ。料理が変わったのなら、盛り付ける器も別に用意されただろうから。巡講スタートの時点から、円了が切実に必要としたのは「より多くの人々に、自分の言葉で、自分の考えを伝える」ことだった。その意味では、円了にとっての巡講は、自分の意思や嗜好で続けているものでもなかった。どれだけ辛く苦しい時でも、続けなければならなかったのだ。「墓の下でゆっくり休む」、そのときまで。

円了の生涯を通じた宿望——それが「何」であつたかは、確かなことはわからないが——は果たされないままに終わったことは間違いない。どこに問題があつたのだろうか。理想が間違っていたのか、方法に無理があつたのか、実践レベルでの失敗なのか。何も明らかにされないまま、

円了の思想は路傍に打ち捨てられたようになっていく。もはや誰も取り合うとはしないが、丁寧に拾い集め汚れや埃を拭き払えば、今なお役立つものであるかもしれない。困難多事に打つ手なしの今日にあつては——少なくとも、きらめくような新奇な言葉で空中戦的議論をかわすよりは——少しはましな作業といえるのではないか。円了の活動期——明治中期から大正初期——はちょうど、この国が「近代」のかたちを整え、国際社会の中央舞台に進み出ようとしていた時期に重なっている。円了が何を考え、どのように実現しようとしたか。それを一括りに円了の「思想」と呼ぶなら、その思想を明治以降の日本の動向にどう位置づけるべきか。これは、後世に投げかけられた円了渾身の「問」のようには思える。

本稿は、以上の認識からスタートするのだが、決して井上円了の再評価を与件とするものではない。再評価——再否定になるかもしれない——に先駆けて、円了の思想や言動の本質を探るのが狙いである。表題を「序説」としたのも、そのためだ。

また、ここまで述べてきたことも、これ以降に記すことも、研究者を含めすべての読者に納得してもらえないようには構成できないだろう。本稿は言うなれば「従来の円了観」への反駁ののだが、かんじんの円了観がまた固まっていな

どのような反駁も、空転するか吸収される可能性から免れないだろう。もう一つの理由は、本稿が私にとつてもまだ試案に過ぎないからだ。表題を「序での説」と読まれることは覚悟の上だが、それでも私は本稿を広く社会に提示する意味はあると自負している。

本稿の狙いをもう少し具体的に言えば、円了の顔に「べつたり」貼られたレッテルを剥がす試みである。先に触れたシューキョー／アイコク／ヨーカイのレッテルこそ、円了が事蹟相応に評価されず、一般向けの本にも円了が現れにくい原因となっている。先に触れたように円了観が固まりきらない理由でもある。

もちろんレッテルの下にどのような顔が隠れているかは、わからない。剥がしてみれば「決めつけ」でもレッテルでもなく、掛け値なしの「正札」だった、となるかもしれない。ひよっとすると今よりもっと醜悪な、狂信的で排外的なオカルトじみた怪物(「妖怪」)の相貌が覗くかもしれない。そのときは本稿の表題をサブタイトルの「妖怪博士の奇想」に変えることにしよう。目的は円了の美化ではない。結論を急ぐこともやめよう。あせらずゆっくり、レッテルは端の方からちよつとずつ剥がしていくことにしたい。

## 《先行する円了の背中》

ここで、あらためて井上円了60年余の生涯を——人名辞典よりは少し丁寧な——先の記述と重複するところもあるが略述しておこう。まずは本稿の狙いや目的からは離れた、フラットな「略年譜」である。

井上円了は激動の幕末期に生まれ、旧幕時代の10歳まで次期住職となるための宗門教育を施された。明治元年からは尊皇思想家で洋(医)学者・石黒忠愼(1845—1941)の私塾で漢学・西洋数学を学んだ。13歳で出家得度の後、旧長岡洋学校英語科に入学するが、教団のエリート育成方針により東京大学(哲学科)に給付留学する。

学生時代には哲学会や哲学祭を興した。28歳で卒業すると文部省への出仕も教団での教職も固辞し、翌年独力で哲学専修の私学校「哲学館」を創設する。同時期、日本(国粋)主義結社「政教社」の創設に加わり「護国愛理」を叫ぶようになる。既に教団から離脱していた——ただし還俗はしていない——円了は、半僧半俗の立場から日本仏教(正しくは僧侶)の頹廃を嘆いて仏教哲学を高唱し、返す刀でキリスト教を全否定した。

一方で、欧米を含む生涯3度の世界旅行を敢行し、南半球から北極までを踏破した。私学校経営者の代表として内閣うち同時代に属する「部分」である。後者は前者に包含され、前者は後者を要素とする。「万世不変の真理」(「真理」)を愛することは、現に自分が生きている「時空間の真理」(「国家」)をも護ることになり、「国家」を護らなければ「真理」を愛することにはならない、と主張される。学者は真を愛すべし/国民は国家を護るべし、といったように分けられてはいない。円了にとっては国家も真理——一部——なのだ。だからこそ「護る」べき対象となり得るのである。裏から覗けば——神話に依拠するような——真理に外れた国家は、円了にとって国家ではない、したがって護る対象でもないということになる。

次に、手段としての「通俗化」と「実践」を整理しておこう。これは円了の思想を追跡する上では——「護国愛理」以上に——重要なタームである。

円了は世の学者を「貴族的学者」と呼び、自らはこれと峻別して「百姓的学者」と称した。前者——円了以外の学者——は大衆の事情も理解のレベルも考慮せず、自分の言っていることが世間の人にわかるうがわかるまいが頓着せず、自分が高尚と考える研究だけを目的とする、一人よがりの学者である。一方、後者——円了だけ——は「地方人民の實際身に修め、心に守るべき心得を説」いていると言いい、さらに「其の一言一句ただちに実行し得ることを

直属の高等教育会議議員を務めるかたわら、妖怪学を創始し世間の迷信打破に励み、「妖怪博士」・「お化け博士」は、今日までの円了の代名詞となっている。

明治35年に勃発した「哲学館事件」によって精神疲労に陥り、「独力経営二十年」の学校教育から身を退くと、「哲学堂」を拠点とした社会教育活動に一転し、後半生を費やして全国での巡講に邁進する。膨大な著述を残し、大正8年中国・大連での講演中に昏倒、意識が戻らないまま現地で客死した。

続いて、円了思想追跡のためのポイントを整理しておく。ここから私見が混じっていく。

井上円了は「護国愛理」という理想——円了の全生涯を支え、円了が生涯を捧げた理念——を掲げ、それを「通俗化」という方法で「実践」に移そうとした。その駆動の両輪となったのが、著述と巡講だった。

「護国愛理」とは、先に引用した明治24年の一文で「国家の為に其力を盡し一志を立て、真理の為に其心を竭さるへからず」と記されたものだ。詳細の考察は次号以降に譲るが、ここで留意しておきたいのは「護国」と「愛理」は分割されないという点である。円了の定義によると「理」は万世を通じて不変の「真理」、国家はそのような真理の「教える」と自負し、これを「活学活書」と称した。

円了の自覚としては、「通俗化」とは単にわかりやすく説くだけでは不十分で、ただちに「実践」に移せるものでなければならなかった。これが円了流儀の「通俗化」の本領であった。学校教育の場では教科書的に、大衆向けには巷談や随筆めかし、あるときは旅行記や小説の体裁をとり、別のときには研究報告や論文を装って、トピックやジャンルを跨ぎ、時勢や世情に棹さすかたちで、一般の人々の「実践」に直結させようとした。このような著述における言説の「通俗化」は、巡講という行為の「通俗化」でも貫かれ、「護国愛理」の「実践」はひたすら「通俗化」という方法で追求されたのである。円了にとって、理想(「護国愛理」とは「実践」されるべきものであった。言い換えれば、いかに理想の「護国愛理」も「通俗化」できなければ、何の値打ちもないのである。

そのような「通俗化」は、一方で大衆迎合——曲学阿世——と受け取られ、レッテル貼りにも貢献することになった。それでも円了は怯まなかった。自分に信じているところがあった。その「所信を世に表白する者なれば、世評の如何は敢て問うところには非ざるなり」と、胸を張った。たとえ批判——誤解——されようが、「通俗化」という独自の手法を手放さなかつたのである。



このように確信的な覚悟のもとに徹底した「通俗化」が行われた以上、単独の著述やタイトルを手がかりに類書と照合しても、ほとんど何も得るところはない。ある書の題名に「学」の字があっても、まったく当てにはならない。百姓の学者である円了は、とっくの昔に「高尚な学理」も学を「究むる」ことも捨てていた。「学」の表記もまた、「実践」を促すギミック（仕掛け）の一部に過ぎず、似たようなタイトルでも時期や読者対象が違えば、同じ内容とは限らない。一貫性も整合性も端から意識の外なのだ。円了の「活学活書」は、系統立った「学」を捨ててこそ成り立つのだ。ならば、円了思想の追跡もまた、通俗化／百姓学者／活学活書の枠組みでなされなければならないだろう。

### 《円了を収める「匣」をつくる》

1970年代後半から始まった本格的な井上円了研究は、残された膨大かつ広範な分野の著述を、主にタイトルを手がかりに細分し、一語一句の専門的検証から全体の再構築に向かう精緻でオーソドックスな——論理的・理性的——方法で進められてきた。専門的には高水準の研究成果が蓄積されているが、この上さらに思想の全体像や本質の価値を解明するには、オーソドックスでないもう一つの方法を加えるべきだろう。

傍線部が追跡路の道標で、これらが次回以降の主たるテーマとなる。もちろんこれも「仮設」であるが。

円了の全著述を奈良県名産の扇子に喩えると、「要」の部分に当たるのが、明治20年（1887）『**仏教活論序論**』。扇面を支えて広げる「骨」は、翌21年（1888）の「坐なからにして国を富ますの秘法」、23年（1890）の『**星界想遊記**』、26年（1893）の『**妖怪学講義緒言**』、27年（1894）の『**戦争哲学一斑**』、（35年（1902）の『**勅語玄義**』の5本。『**仏教活論序論**』以前の諸著作は「要」において束ねられ、ここから「骨」を支柱として膨大な著述が「面的」に拡大展開していく。そして、山あり谷ありの扇の「天」にあたるのが「明治35年を迎える辞」である。

全体として眺めると、円了が為そうとしたことは、日本固有の国家の枠組み（「国躰」）や国風を基礎として、自覚と責任ある政治主体者を確立し、西洋列強に伍すること、あるいは——日本固有という意味では——西洋には真似の出来ない、平和で理想的な社会経済体制を築くことであった。

これこそ円了が著述を通して語りかけ、全国を駆け回って説こうとしたものの「正体」であった。

先に扇子に喩えた各著述は、このあらすじの上では、次のような内容を示すものとしてプロットされる。

それは、一本の基軸（心柱）だけはしっかりと中央に立て、テントのように張り巡らした幕の表面に、先に引用した明治24年の一文に見えるキーワード、例えば「天下の正道」、世間の風潮、教育、信仰などのラベルを付け、膨大な著述等に現れる関連する文言をプロットし、適宜修正・変更も重ねながら探っていく——言うなれば仮説推論的——な方法である。進めていくうちに、いくつか支柱も見つけない。本当は四隅に軸のある「匣」ようなものにしたかった。すると円了が抜け出さないように。

本稿は、このオーソドックスではない方法の試行・実験とも言える。揺るがせない基軸に採用するのは、ここまで何度も引用した大正8年（1919）の言葉だ。

休む必要はない。死んでから墓の下でゆっくり休む。

円了はたびたび深刻なまでに体調を崩している。夥しい量の著述と過酷な巡講は、決して無関係ではなかったはずだ。円了は自らの健康や生命をも顧みず、当時の人々に何を語ろうとしたのか。独り日本の——当時の実質的な海外の「国内」も含め——全土を巡り、何を説こうとしたのだろうか。

円了の著述内容を——残念ながらすべてではないが——読み解いた上で、現段階における私の仮説を以下に略述

1. 『**仏教活論序論**』（1887）：  
建国の宣言——近代国家「日本」の建設
2. 「坐なからにして国を富ますの秘法」（1888）：  
経済のあり方——国際観光立国論
3. 『**星界想遊記**』（1890）：  
国のかたち——超極小国家ネットワーク
4. 『**妖怪学講義緒言**』（1893）：  
統合の原理——日本の「カミ」の存在証明
5. 『**戦争哲学一斑**』（1894）：  
外交の基本——絶対平和論
6. 『**勅語玄義**』（1902）：  
主権者の規定——臣民（従属）主権主義

### 《The game is afoot——さあ、追跡をはじめよう》

明治35年正月、扇をぱつと広げた「天」のところから、円了のメッセージが号令のように発出された。

明治維新の大業は明治初年に於て其三分一を完成し、二十年三十年に於て其三分二を結了し、愈々之を大成するの日は四十年五十年の後をまたざるべからず

この「明治35年を迎える辞」には、さらに「諸君はすでに日本国民たる以上は、報国の義務として大に奮て明治維新の大成を自ら任ずるの決心なかるべからず」、あるいは「自らその大成を任ぜんと欲せば、千載再来の今なく、万古再生のわれなき」といった、ただならぬ決意——あるいは傲を飛ばすかのような——文言が鏝められている。

円了にとって、いまだ明治維新は果たされていない。近代国家日本もいまだ建設されては、いなかったのだ。

次号では、井上円了の「建国の宣言」(『仏教活論序論』)と「経済のあり方」(「坐なからにして国を富ますの秘法」)——なんと、国際観光立国論!——を読み解く。

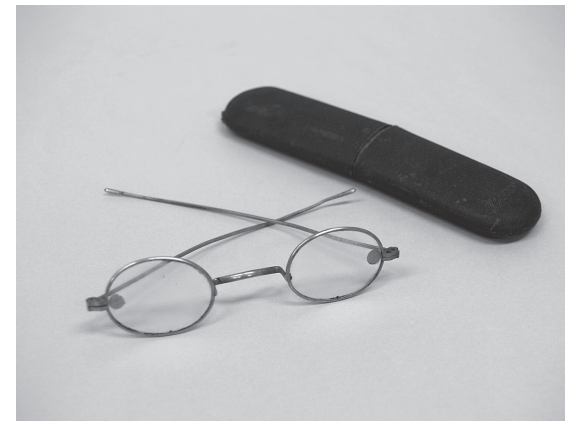
(次回へつづく)

#### 《引用参考文献一覧》

- 上田正昭他監修『講談社日本人名大辞典』(2001) 講談社  
刈部直他編『日本思想史ハンドブック』(2011) 新書館  
東洋大学井上円了研究センター編『論集 井上円了』(2019) 教育評論社  
三浦節夫『井上円了』(2016) 教育評論社  
大日本雄弁会編『高島米峰氏大演説集』(1927) 大日本雄弁会  
田村晃祐「井上円了の生涯と思想をめぐって」『井上円了センター年報』第12号(2003) 東洋大学井上円了研究センター  
「公開状百通 第十八 井上円了に与ふる書 上・下」(1904.1.23、24) 読売新聞 第9559、9560号  
井上円了「南船北馬 第一編」『井上円了選集 第十二巻』(1997) 東洋大学  
井上円了「哲学館専門科二四年度報告書題言」『忠孝活論』(1893) 哲学書院  
井上円了『仏教活論序論』(1887) 秀英舎  
井上円了「坐なからにして国を富ますの秘法」『日本人』第16、17、20号(1888)  
井上円了『星界想遊記』(1890) 哲学書院  
井上円了『妖怪学講義緒言』(1893) 哲学館  
井上円了『戦争哲学一斑』(1894) 哲学書院  
井上円了『勅語玄義』(1902) 哲学館  
井上円了「明治35年を迎ふるの辞」『浦水論集』(1902) 博文館



なかじま・けいすけ  
奈良県立大学ユーラシア研究センター特任准教授/副センター長。主な著作として、『勅語玄義』に見る奇妙なナショナリズム 東洋大学井上円了研究センター編『論集 井上円了』(2019) 教育評論社、「地域経営の視点から見た『平城遷都一三〇〇年祭』」『都市問題研究』第60巻11号(2008)、「もう一つの観光資源論」『日本観光研究会研究発表論文集 No.29』(2014)、「井上円了の国家構想」『東洋大学井上円了研究センター年報 vol.26』(2018)、「南貞助論—日本の近代観光政策を発明した男」『日本観光研究会研究発表論文集 No.34』(2019)など。



井上円了愛用の眼鏡  
提供：東洋大学井上円了哲学センター

井上円了が見た奈良(1)  
——連座(レンゾ)

明治39年(1906)4月2日、井上円了を載せた列車は新橋駅を出発した。ここから奈良への巡回講義の旅(「大和紀行」)が始まった。途中、相州秦野町(現在の神奈川県秦野市)に立ち寄り、京都を経て奈良に到着したのが4月5日。以後、本文に記したとおり「吉野山中人車の便なき」ところを含め、26町村(当時)での講演回数は76回に及んだ。

一月半にわたる「大和紀行」の最終講義は、5月18日、磯城郡香久山村(現在の桜井市西部)の法然寺で行われた。「聴衆満堂、すこぶる盛会」とご満悦の円了は、この日の日記に興味深い記述を残している。

この日、連座と称し、農家みな餅をつきて休業す。当麻寺の故事より起こるといふ。(1)

連座と書いて「レンゾ」と読み、「事典」などでは次のように説明されている。

奈良盆地の農村地帯では、3月の中旬から5月の中旬にかけて、近在の社寺の祭礼の日にあわせるようにして、春の一日、農休みの日を設け、村中で楽しむ風習があった。これをレンゾとよびならわし「する」。(2)

「レンゾ」の語については「ことばの由来はよくわかっていない」とし、「当麻寺の練供養(5月14日)」を意味する『練道』からきたというような説明も納得

含め8町村だけである。もっと言えば、日付が記載されていない等の町村を除き、4月3日は例外なく——高田町等も——農家の休日、すなわち先の『事典』がレンゾと定義した「春の一日、農休みの日」に該当するのである。「大和紀行」にあらわれた香久山村も、この大正4年の調査では、レンゾの日は4月3日と記録されている。円了の見た5月18日ではなく。

幕末あたりから宮中では神武天皇の没した日(旧暦3月11日)に祭祀が執り行われていた。この宮中行事が明治41年(1908)の「皇室祭祀令」で神武天皇祭となり、新暦にあたる4月3日が国家の大祭の一つと定められた。そして大祭日は「家々国旗を掲げ一戸一人は必ず其の家族を代表して其(祭典の)式場に参列し祭典に与」ることとされ、奈良では時期の近いレンゾと重合したのだ。(3) その結果、香久山村のレンゾ——連座——も、円了が目撃した5月18日から、4月3日に「変更」されたのである。(8)

円了の先の記述は、明治39年から10年の間に、国家が定めた祝祭日が「国民の義務」(9)となり、旧来の農村生活における伝統的祭礼に置き換わるかたちで、神武天皇祭が農耕儀礼として受容されていたことを表しているのである。

しにくい」と、円了が記した説をあっさり却下する。そして「共同の行事で『連れる』という意味があるらしいとは思われる」と言い、農家の「生業暦と結びついた『休みの日』の意識」と「社寺への行事の参拝」に着目して、3月22日に始まる法隆寺会式から5月14日の當麻寺の練り供養(練道)までを、『レンゾ』という意識がみられた『社寺の祭礼』と位置づけている。つまり、レンゾ——連座——を「レンゾ」と意識されていない地域も含め、寺院とかかわる「村の春先の行事」と捉えているのである。(3)

一方、市町村史などでは、明治39年の「円了説」も力を失っていないようだ。当時の香久山村に近い今日の橿原市は『市史』の中で、次のように述べている。レンゾという言葉も、今では連座などの字をあてたりしているが、その語源もおそらく練道供養のレンドオがレンド・レンゾと変化したものであろうと考えられる。(4)

ただ、残念ながら出典は円了の「大和紀行」ではないようだ。折口信夫の大正7年(1918)の論考「方言」に、

○れんど・れんど 此語は「……」恐らく練道供養のれんどおが、れんど・れんどとなつたものであらう。(5)

と記述されている。一目(一読)瞭然、『市史』の記述はこの引き写しである。引用元の明記はないが、折口も苦情の言えた立場ではない。この文言の前に

「思ひ当るのは、当麻寺の練供養である」としているが、自分自身で思い当たったのかどうか。この論考が掲載された雑誌(「土俗と伝説」)の発行は、円了の記述から12年も後だ。明治39年、当時折口はまだ國學院大學の予科生だった。折口は若い頃、円了がつくった「哲豆亭」に寄宿していた。円了からの薫陶や何らかの示唆や影響を受けていて不思議はないはずだ。

本稿の文脈でより重要な事実、明治39年当時、円了が伝聞体で記したことから窺えるように、少なくとも香久山村では、レンゾ——連座——が「当麻寺の故事より起こる」と考えられていたことだ。円了が書き残しておいてくれたおかげで、「レンゾ」が「当麻寺の故事」説(円了説)が俄然信憑性を帯びてきたのである。

では、先の『事典』の記述には根拠がないのだろうか。「奈良盆地の農村地帯」のレンゾの実施の状況を見ると、当麻寺の練供養(5月14日)前後の日に行われる地域は少なく、4月3日が圧倒的多数を占めている。最近の傾向ではない。大正4年(1915)に奈良県教育会の依頼で行われた調査(6)によると、記録が残っている55町村(当時)で、5月に入ってからレンゾは16町村。そのうち当麻寺の練供養に合わせて5月14、15日に行われているのは、高田町(当時)ほか3村(以下「高田町等」)しかない。他の12村は4月3日にもレンゾが行われている。また、4月3日にレンゾを行っていない町村は高田町等を

引用参考文献

- (1) 井上円了「南船北馬 第一編」『井上円了選集12』(1997) 東洋大学、p.215
- (2) 倉林正次監修『祭礼事典・奈良県』(1992) 桜楓社、p.226
- (3) 同上書、pp.226-228
- (4) 改訂橿原市史編纂委員会編『橿原市史 本編 下巻』(1987)、p.861
- (5) 折口博士記念古代研究所編『折口信夫全集第二巻』(1966) 中央公論社、pp.87-88
- (6) 市川秀之『民俗』の創出(2013) 岩田書院、pp.143-149
- (7) 野上雄治著・発行『祭祀』(1909)、pp.6-11
- (8) 「耳成村大福村香久山村風俗誌調査書」[1]…上(奈良県立図書館蔵)には、「四月三日 桃ノ節句(神武天皇祭半日) 連座(半日)」(p.137)と記載されている。
- (9) 野上雄治(1909) 前掲書、p.8



南船北馬集  
提供：東洋大学井上円了哲学センター